

前夜 下

吉開那津子

新日本出版社

前 夜 下

吉
開
那
津
子



新日本出版社

吉開 那津子（よしかい なつこ）

1940年5月 東京生まれ

日本民主主義文学同盟員

主な著書「旗」「葦の歌」「青春の肖像」（新日本出版社）

前 夜 下

1980年3月30日 初 版

定価 1300円

著 者 吉 開 那 津 子

発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発 行 所 株式会社 新 日 本 出 版 社

電 話 東京 (478) 3 3 1 1

振替番号 東京 3-13681

印刷 杜光舎印刷 製本 小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。

本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社
あて事前に承諾をお求めください。

前
夜
下

装
丁

永
井

潔

翌日は火曜日だった。福家は明日が明け番に当たっていたので、もう一日の夏期休暇をやつとのことでとりつけ、C番のあと家に戻って、車で二時間ばかりの時子の実家へこどもたちを迎えにいくつもりでいた。勿論、福家もその夜は泊めてもらう胸算用だった。福家は時子の父と一杯やり合うのが、そんなに嫌いではなかった。

時子が化粧品包装会社にパートに出ている、この夏休みの間、こどもたちは母親のいない家で放っておかれていた。小さい方のふたりは何とか大人しくその日その日を過ごしているようだったが、一番心もとないのは、長男の英雄だった。夏休みのはじめ、友達の種類だという家で、解体の仕事を手伝って来て、その金で八月のはじめから五日間ばかり北陸へ旅行にいきたいという。あまり禁止ばかりしていても、何をやり出すか分からない。自分で稼いだ金なのだから、とそれを許したら、一週間してその旅行から

帰って来た時の英雄は、裾を女のスカートみたいにひろげたズボンをはき、ちょぼ髭をのばしていた。髭を当たらせて、黒い学生ズボンに着更えさせたら、今度は時子が、近所から、英雄が女の子と市内を歩いていたという噂を聞いて来た。しかし、福家が問い質しても、時子がヒステリックに叱りつけても、そのことについて英雄は口答えもしないかわりに言い訳もせず、ただ黙ってしまうのだった。福家は、時子に家において、こどもたちを見てやれ、と喉まで出かかって、しかし、いっても仕方なからうと思うのだった。時子が家にいたからといって、英雄の素行が改まるものとは思えず、時子を家の中にとじこめておけば、彼女の苛立ちはますます悪化するだろうと思われるからだだった。

ただ、中学二年になった長女の仁奈が末子の千晴の面倒を見て、終日留守番を続けているのを思うと、福家は何ともやり切れなかった。福家自身だって、終日親のいない家で大きくなったので、中学二年ともなればそれ位のこととは出来て当然だと思いながらも、勤務の最中、自分のバスにふっと仁奈と同じ年頃の女の子が乗って来たりすると、しよんぼりと窓辺に坐って、朝、母親のつくってゆく弁当を食べているふたりを思い出したりした。

八月のはじめ、実姉のところへ泳ぎに連れて行ってやるつもりだったのも、何となく機会をのがしてしまい、英雄

は旅行をしたのだからよかったが、下のふたりはどこへも連れていってももらえない夏休みになりそうだったので、中旬を過ぎてから、三人を時子の実家へあずけて来たのだった。時子の実家は夏場だけの民宿をやっている、いわば書き入れ時であり、こどもをあずけることは福家も気が引けたが、三人分の料金を払うことにし、仁奈にはよく手伝うようにいって聞かせて、福家は自分の車に三人を乗せて連れていったのだった。

時子たちが、まだこどもの頃、父親が海でとって来る魚をかねて歩くのは母親の役目だった。しかし「かねり」の風習は次第に消えてゆき、父親も年をとって海へははいらなくなつてから、冬場の間は、町へ出て細々としたものを買つて来ては、それに僅かな利をつけて売つて暮らしを立て、夏場は町から泳ぎに来るひとたちに母屋を開放し、自分たちは納屋に寝るようにして、民宿の真似事のようなことをしていた。しかし、娘三人は皆、独立したあと、老いた父母だけの暮らしはそれだけでどうにかなっているようだった。時々、娘たちに十萬、二十萬位の金は貸せる位にまでなっているらしかった。

福家にとっては、時子の両親は、自分の親よりむしろ好ましい存在だった。ほとんど極貧といつてもいいような生活をして来たのに、こせこせしたところがなかった。多少

田畑を持った家に生まれた福家の母親の方が、金銭への執着がずつと強いのは福家には不思議に思えた。時子の両親は、福家がつまらないものでも手土産に持つてゆくと大層喜んで、母親はすぐ近所へ出かけていって、福家の好物の獲れたばかりの生うにをもらつて来てくれた。

舌にまとい付くような豊潤な海の香りを肴にして、義父とふたりテレビを観ながら、ほとんどことばらしいことも交わさずちびちびやる時、福家は自分がだらしない程に寛い^{くろ}でいるのを覚えた。義父母は付き合ひのに難しいところがなく、裏と表がなかった。こういう両親から、どうして時子のような不満の多い娘が生まれたのかと、福家は時々考えるのだった。

母親はいまでも、少し大きいものを運ぶ時は、それをひよつと頭上に乗せ、低く、はつきりしない調子でうたつた。

壇ノ浦にて破れし平家

落ち行く先は安岡浦よ

ひそむ女の魚売り姿

桶を頭に尻高からげ

アジ、サバ買えよ、タイ買えよ

命ずる声は武士の声……。

「すぐ、いくん」

納屋の軒下にスバルを入れてから、福家が二階へ上がってゆくと、こどもたちのいない家の中を、小ぎれいに片付けて、時子は待っていた。

「別に急ぐことはなからう、飯食うていこう」

もう九時を少し廻っていたが、これから空腹のまま二時間も乗り切りになるのではかなわなかった。

「あしたにしたらどうね。早う発つことにして」

「それでもええが、しかし英雄がまた何をやらかしとるか……」

「うん」

一昨日の日曜日、時子は会社の休みの日を利用して実家へ帰り、こどもたちの様子を見て来たのだが、英雄が町から遠い漁村で退屈して、危険な岩場を選んで潜っているらしいと老母が心配していることを福家に伝えていた。

「おまえもちょっと休みをもらっていかんか」

福家は卓袱台の前に坐りながらやさしい気持になって時子にいった。

「わたしは休めんよ。忙しい最中なもん。三カ月の勤め具合を見て、本採用にするかどうか決めるちゅうんじやけん、やたらに欠勤は出来んいね」

電気釜を自分の近くに引き寄せながらいった。

「おまえ、本採用にしてみらうつもりなんか」

「いけんの」

きつい調子で福家の目を見据えた。時子がこんな風に、とがったような調子でものをいう時が、福家は一番いやだった。

「仁奈や千晴をどねえするんか」

「仁奈はもうちゃんと千晴の面倒見て待ちよるいね」

「可哀想と思わんのか。あねに小さいまま放っておかれて。英雄かて、親が少し真剣に見てやらんと、おおごとにならんとはいえんど」

福家は少し気色ばんだ。

「小さいって、わたしら育つ時は親の顔も分からん内から放っておかれたもんよね。仁奈まで大きくなっちゃりやあ充分よ。結構ようやってくれちょるんよ。夕方んなれば、ちゃんとお米といどいてくれるし」

時子は思いの外冷静にかえして来た。

「しかし、こどもは何と思うちょるか分からん。仁奈に聞いてみたことがあるんか」

「こどもに面と向かって聞いてみたら、そりゃ親と一日中一緒におる方がええっちゅうに決まっちゃるじやないの」

時子は食卓の上を拭き、冷やっこに烏賊の刺身を並べていた。また冷やっこか、と福家は思った。冷やっこは豆腐

を買って来て包丁を入れればいいのだから、時子としては手数がはぶけて具合のいい物菜なのであろう。福家は豆腐が嫌いではなかった。しかし、時子が勤めに出ることに夢中になり、こどもを放り出し、食事もいい加減なもので間に合わせようとするとするのを見ると、癪に触った。

「で、いくら稼げるんか」

卓袱台の上のものを手をつけながら福家は聞いた。

「先月は一萬二千元とちょっともろた」

蚊取線香を卓袱台の下に押し込みながら時子は、得意そうに答えた。

「それ、どねえしたんか」

「千晴のワンピース買うてやり、わたしの帽子買うて、あとは貯金したよ」

貯金、というところに力を入れて時子はいった。福家は自分が運んで来る四万円に満たない給料では、五人の衣食を何とか満たすだけで、蓄えまで廻らないのはよく知っていた。

「それにしてもおかしいんは、わたしが勤め出してからお姑さんは何もいわんの。えろろ悪くいわれるかと思うとったら、有馬さんも何もいうとられんし」

下の道路を隔てた有馬家の夫人が、福家の母親の愚痴をよく時子に伝えるのだった。時子が神経を尖らせる時は、

たいてい有馬夫人の進言が原因だった。福家にとっては迷惑きわまりないことで、それで彼は有馬夫人にどうしても好感を持つことが出来なかった。

「いままでみたいいろいろな言い付けにも来んし」

「来てもおまえがおらんじゃやえ、しょうがなかるう」

「それそれ」

時子はうれしそうに笑った。

「出かける時、母屋に挨拶ぐらいしておけよ。留守中何で世話かけるか分からん」

「それ位、いくらわたしでも、ちゃんとしちよるいね」

「んで、お袋は何ちゅうとる」

「ああ、いっておいで、いうてよ」

「それから」

「それ以上は何もいわん。けど麴子さんはよう思っちゃらんじやろ。自分も家ばかりにおるのはつまらんし、始終お姑さんと一緒やし。面白くないのはよう分かるけど」

豆腐に箸を刺そうとした時、フクチャンと誰かが呼んだような気がした。そういえば、先刻、坂道をモーターバイクが昇って来たようだったが、母屋への客だろうと思っていたのだ。はっと耳をすますと、声はすぐ階下から聞こえていて、どうも声の主は菊村のようだった。福家は反射的に立ち上がって、肌着をかぶりながら階段を走り降りた。

ドアを開けると、菊村が汗と埃にまみれたどす黒い顔をして立っており、うしろに府川の顔ものぞいた。府川は酔ったように足元をふらっとゆるがせて、坐り込んでしまった。

「どねえしたんです。府川さん」

福家は菊村と府川がこの近くを通りかかって、気分でも悪くなったのかと思った。

「いや、菊村君がバイク飛ばすもんじゃけ、夢中になってしがみついたら、目が廻ってしもうて」

土に手をついて立ち上がろうとする姿勢をとっても、まだふらふらするのか、そのまま動かずこちらを見上げていた。

「で、何か」

訪ねて来た時間が尋常でないので、まず何よりもそう聞かずにはいられたなかった。菊村は汚れた顔に、目だけは異様にきらめつかせながら、鋭く福家をみつめていたが、

「ちよっと、一緒に来てもらえんか」

ようやくのことであった。ふたりのたたずまいに並大抵でないものを感じながら、福家は迷った。今夜これから子どもたちを迎えにいくと、先方にはもう連絡がいつている。

「いますぐじゃないとまずいんか」

「ああ」

あえぐように菊村は吐息した。何か起こったのだ。福家はすぐに気が付いた。

「どこへいくんか」

「児玉んとかいや。児玉にはそねえいうて待たしちよる」
福家にも、いやとはいわせないという断乎としたいいううだった。

「なら、ちよっと待てえの」

ともかくいかにやなるまい。福家は階段を駆け戻った。
菊村が府川と何かことばを交わすごそごそとした動きが福家を追っていった。

卓袱台の前に坐り込んでこちらを見上げている時に、いきなり、

「ワイシャツ出してくれ」

といった。

「ちよっと、出て来る」

「ちよっとで、どこへ」

いぶかしげな顔をして、それでも時子は整理ダンスの方へ立っていった。

「児玉のとこいや」

「ごはんは」

「いらん」

「なら、これどうすんの」

「おまえ、食え」

「わたしひとりです、こねえに食べられる訳ないでしょ」

無視して、福家がワイシャツに腕を通していると、

「どうせ、また、飲みにゆくに決まっちゃるいね」

精一杯の憎しみをこめて毒付いた。福家はその神経質な声が階下の三和土に立って待っている菊村の耳にまで届かなかったかとはらはらした。福家は時子の顔をみつめたが、かえすことばをみつけることが出来なかった。俺たちは駄目な夫婦だ、と急に実感した。

福家と時子は一応、恋愛して結婚したということになっていた。恋愛といっても、福家は時子を絶世の美人と思つた訳でもないし、時子と一緒になれなけりゃ死ぬの、生きるの、という具合に思いつめたという訳でもなかった。ただ、あの頃、百人近くいたバスの車掌の中で、時子は何かひたむきな、一生懸命さで働いていて、それが福家の目にとまった。あの頃の時子は時子なりにいいところを持っていたのだ。

しかし、いま、時子はだんだんに崩れて来ている。ただ自分の周囲に不満ばかりを投げつけるようになって来ている。福家は淋しさにおそれながら、目を吊り上げて立っている時子の横をすり抜けた。同志たちは、福家が、時子

を覚に迎え入れれないのは、福家の小ブルジョア意識のせいだ、女房を大人しく家に置いておきたいからなののだといつて批判していた。だが、俺だけが悪いんじゃない。こういう女を、どうやって入党させようというのだ。

「こどものところへは今夜遅くか、明日早くいく」

時子から一刻も早く逃れたい気持ちになって三和土へ突進した。裏山の方向で、雷が空にころがる音がしていた。

外へ出ると、泣いたあとのような目で菊村が福家を見つめていた。

「家におつてくれて、えかった」

府川が心からほっとしたという調子でいった。彼はもう立ち上がっていた。

「これから女房の実家まで出かけようか思うちよつたところいや」

「なら余計えかった。菊村君がえらい勢いで飛ばすんで、山道の時は何度振り落とされるか思うたが、もし間に合わなんだら、これから追跡せにやらんかったけえのう」

府川が菊村を振り返っていった。菊村は黙って、頷いていた。福家は先刻からふたりの態度にぎこちないものを感じていたが、特に菊村は変だった。何かあったのに違いない、と福家はまた考えた。

「府川さん、帰りは福ちゃんに乘せてってもらって下さ

い。わしはバイクでうしろからいきますけえ」

と菊村は再びバイクに股がりながらいった。

「ちょっと車出して来ます」

福家は車に向かって歩きながら、二階の窓から時子がこちらを見おろしているのに気付いた。電灯を背にしている顔は陰になっており、その表情は見えなかった。表情が見えないことで、福家はかえって救われた。

助手席のドアをあけると、府川は乗り込んで来て、

「バイク乗ったあと、あねえにふらふらするとは思わなかった」

といった。

「運転する方は何でもないんですが、それにちょっと長かったでしょう」

車を発進させながらいった。

「血相かえて、どねえしたんです」

だからだと坂を下ってから、思い切って福家は府川にたずねた。

「福ちゃんとか、花始めたんか」

府川は福家の問いには答えず、フレームの方を振り返っていった。春先まできゅうりが栽培してあったフレームには、シクラメンの鉢が並んでいて、五センチ程の丈にまで伸びていたが、それは暗くて遠目には分からないはずだっ

た。

「よう分かりますね、府川さん」

福家は感心していった。府川は化学産業の労働者出身だった。

「そりゃこう見えても、青木君が来てくれるまで、わしは農漁民部をやっとったけえのう」

「へえ、府川さんが農漁民部を」

福家は笑い出しながらいった。府川に農漁民部というのはいかにもそぐわない感じだった。

「笑うなよ。その時はわしは婦人部も兼任しちよったんだ」

福家はいつそう笑ってしまった。

「専従が少ないと、限られた常任で何でもやらにゃならんのいや。わしには出来んなんていうとられんのいや」

「なるほど」

県道へ出る手前の信号で、菊村のバイクがうしろから走って来て、福家の車の横にとまった。府川が見上げる恰好で窓から笑いかけていた。

「家の方は、ずっと弟さんがやっちょるんか、福ちゃんとは」

車が走り出したところで、府川はまた聞いた。今夜の府川はなぜか福家のことをあれこれ知っていたがっているようだ

った。

「ええ、近頃、野菜の出来が悪うなって来て量があらんちゅうんで、弟がひとから教わって花をはじめたみたいです。いまから育てて正月の前にはけるらしいですわ」

福家の家の畑は、最近、とみに土地が痩せて来ていた。

野菜の出来具合がよくなかった。痩せて来たのは、何年もひっきりなしに作ったのと、ごく近所まで人家の波が押し寄せて来ているからだろう。弟の淳二が、埼玉県の農家へ行って研修して来た友人に教わりながら、きゅうりを収穫したあとのフレームで鉢ものの花の栽培をすることを考えた。シクラメンは、室内を常時四、五月頃の気温に保ち、夏はフレームに葦簾を張って土のかわくのを防ぎ、十一月下旬に開花させるようにする、比較的つくり易い花らしかった。淳二は園芸ブームに賭けていて、自信があるようだった。府川はフレームの上に張ってある葦簾に気が付いたのだろう。

「けど、この辺は何としても風が強いし、フレームの傷み具合が悩みの種ですわ。冬の暖房も、夜、知らぬ間に故障でもして、二時間も寒さに晒されれば元も子もなしです。この辺の冬は凍てつくし」

「それで全部水の泡か」

「それですよ。何もかもバアです」

「大変なものやのう」

府川は感心したように唸った。

「雷が鳴っちゃうのう。ひと雨来るか」

府川はフロント・グラスから空をあおぐようにしていった。福家には音が聞こえなかったが、写真のフラッシュのように時々稲妻が光っているのは感じていた。

車は駅に向かう幹線道路から、山沿いに直接会社の方向へ出る舗装のしていない道へはいつていた。福家の小さなスバルは、小石の多い山道をこするようにして昇っていた。府川はうしろを振り返り、

「従いて来ちよるわ」

菊村のバイクのことをいった。

「先刻はこの辺で落ちそうになった。五〇度は傾いたの」
「まさか」

福家は苦笑した。その時、フロント・グラスに雨滴がぶつくと突き刺さり始めた。バック・ミラーを見ると、降り出した雨の中を、懸命に飛ばしている菊村の姿が映っていた。目に当たる雨を避けようとして顔を顰めていた。

「とうとう、降って来やがった」

福家はワイパーを廻した。雨は次第に強さを増し、行手の木立の間に鋭く稲妻が走るのを福家は見た。

「結局、どねえにうまいことばで隠したつもりでおつても、八・八論文は、ソ連修正主義を免罪しちよるちゅうことには間違ひなかるう。久賀、どうか」

児玉に強く攻めたてられても久賀はじつと俯いたままだった。

「現代修正主義を免罪なんかしちよらんど。充分批判しちよるじゃないかあ。ベトナムに対し、もっと効果的に支援せよいうちよるそいや」

府川が久賀のかわりに応じていた。

「いや、ベトナム支援ちゅうことを口実にしてソ連と手を組もうちゅうそいや。それが八・八論文の本心なそいや」

「いいや、そうじゃないいや。ベトナム支援ちゅうことでは、どんな人間とでも、どんな思想の持ち主とでも統一戦線を組もういうちよるそいや。それが八・八論文の精神なそいや。考えてみい、ベトナムは世界最強の帝国主義と、被抑圧人民のたたかいの焦点なんど。ベトナムが勝利するちゅうことは、全世界の被抑圧人民の勝利なんど」

「それがおかしいじゃないか。ソ連はアメリカと手を組んじよるんど。ベトナム人民を売り渡しちよるんど。そういう裏切り者と、どねえして手を組むんです。ソ連と手を組むちゅうんなら日本の佐藤となして手を組まんのか。ソ連

は佐藤とだって手を組もうとしとるじゃないですか。結局、ベトナムを支援するために、アメリカ帝国主義と手を組もうということと同じことになるじゃないですか」

児玉は府川に対して、同僚に口を利く時と同じ乱暴な口調で挑戦していた。福家も久賀も黙って聞くだけだった。久賀は府川から連絡を受けて、勤務が終わってからここへ駆けつけて来たのだった。

福家は、児玉のところへ来て、府川と菊村が福家の家まで迎えに来たのは、自分と児玉が昨日の集会に出たことが地区委員会だけでなく県委員会でも大問題になっているからなのだということをはじめて知った。望月、監物、別所は、大衆の前にはつきり分派宣言をしたということであり、きょうの午前中、県委員会で除名の決定をしたという。この決定は中央委員会の承認を受けるために東京へ送られた。正式に除名になるのは時間の問題なのだった。

監物たちの除名の理由は分派活動であり、かれらと行動を共にしていけば、児玉も福家も当然点検の対象になるというのである。

「そねえに簡単に論理を飛躍させるなよ」

府川は苦笑しながらいった。

「君らの特徴のひとつは、事実の検証を抜きにして、やたらに論理を短絡させることだ。どうなんか。福ちゃんも同

「じゃ考えか」

福家は俯けていた頭をいっそう低くした。彼にはどちらが正しいのかよく分からなかった。児玉のいうことも分るような気がし、府川のいつていることも、もつとも思えた。そして、いま、福家は、自分が除名になるかもしれないという予想に圧倒されそうになっていて、何が正しく、何が間違っているかをつきつめて冷静に考える心の余裕がなかった。からだがふるえているわけではなかったが、精神的には歯の根が合わない、という状態であった。福家はおびえた目を上げて府川をあおいだ。電灯の光のすぐ近くに坐っている府川の顔は、妙にまぶしく光っていた。

「いいか。統一戦線ということを考える時には、その国の権力者と、その国の人民というものを区別して考えねば駄目だ。アメリカだってみてみいや。ベトナムで悲惨な戦争を経験して帰還した兵士たちが、祖国の侵略政策にはつきり反対して、行動を始めちよるやないかあ。息子を戦争で失った母親たちもそれいや。ベトナムを、全世界の民主勢力の統一の力で支援しようちゅうんは、アメリカ国内の平和勢力とも手を組もうちゅうことど。統一戦線ちゅうんは、それ位広い目標をもつちよるそいや」

「ソ連はしかし、アメリカ帝国主義そのものと手を組んじ

やるじゃないですか」

児玉はひるまなかつた。

「ソ連は口では共同行動云々ちゅうとって、実際の行動ではアメリカと妥協して、ベトナムを売り渡しちよるそいや。ベトナム支援ちゅうたつて、申し訳程度に過ぎんでしょう。そねえなソ連が、信用出来る思うんですか、府川さんは。八・八論文も、その点じゃまったく妙ですよ。現代修正主義とはたかいたがら統一戦線を組むという。いたい、どっちなんです。敵なんか、味方なんか。ソ連は敵でもあり、味方でもあるちゅうわけなんです。おかしいやないですか。それをいうちよるんです。何も、アメリカ国内の反戦勢力と手を組むの組まんの、ちゅうことじゃないそいや」

児玉は感情的に昂ぶっていて、府川のいうことを聞き分けるのではなく、やみくもに反発せねばいられない様子だった。議論は堂々巡りを始め、このままでは、いくら喋っても互いに一層興奮するだけで、実りある話し合いにすることはとうてい困難なことのようになされた。

「府川さん、ひとつ聞かしてもろてええですか」

福家はいった。

「ええよ、何か」

「府川さんはいつから中央が正しいと考えるようになった

んです。ついこの間、監物さんらは、府川さんは組織的にはあっちじゃが、考えちよるのはわしらと同じっちゃうとったんです。あの監物さんらが権利停止になった県委員会総会の時も、府川さんは考えはこっちゃったと、確かにいうっちゃったんです」

府川の顔が急に苦しげに歪んだ。

「わしが……」

と一言いつてから、もう一度考えなおして府川はいった。

「わしが、自分が間違うちよる、とはっきり理解したのは、その総会でなそいや」

「はあ」

児玉も福家もあきれて、府川の顔をみつめた。

「その前は確かによう分からんだった。そいじゃけえ、わしはやつらに味方するようなことをいったかもしれん。やつらがあねえな分派活動を始めたについちや、その責任の何百分の一かはわしにもあるかもしれん」

「なして、その時考えを変えたんです」

今度は児玉も反抗する姿勢ではなかった。

「変えたということになるかどうかは分からんが……」

と府川はしばらく口籠っていたが、

「しばらく前から、わしは中国の毛沢東、毛沢東ちゅうのがどうも妙やのうとは思うちよったそいや。ちゅうのは

の、わしはこの世の中には絶対的な真理ちゅうもんはない、と考えて来たいや。つまり人類ちゅうもんは螺旋状に真理に近付いちよるが、決して絶対的真理には到達せんちゅう考えなそいや。われわれ共產主義者が求めておるのも、現実の中では相対的真理に過ぎんのじやと。だからそれは次の時代には乗り越えられる可能性も持つちよるそいや。ところが最近中国では毛沢東は絶対や、中国だけでいうて、世界中の革命にとって絶対的存在なんじや、と妙に絶対、絶対、いい出した。わしはどうもこの、絶対ちゅうことばにこだわりを覚えるそいや。紅衛兵なんちゅうのも、どねえな立場のもんかよう分からんしのう。ところが、この間の県委員会総会の時も、監物は、わしらの考えは絶対正しい、とこう来た。ここでも絶対いや。監物のいうちよるんは、わしらは絶対に正しいんじやけえ、組織原則も何も無視してええんやちゅうこといや。そいであの時、県委員長が分派活動だけはすんないうたにもかかわらず、わしらは絶対間違うちよらんけ、そねえな規則にはしばられんと。分派活動をするのを公然と主張するわけいや。この時、わしは、これはおかしいぞ思うた。気がついたら、わしはぎりぎりの淵まで来ちよって、地獄の底をのぞいたような具合じやったのう。なぜなら、その前はわしもまさか公ではいわんが陰では中央委員会を味噌糞にいうち

よったけえのう」

福家と児玉はことばもなく府川の述懐に聞き入っていた。

「わしは望月は何か暗い陰があつて、好かんかったが、監物は信用しちよったけえ、中央を日和見主義だの、官僚主義だのと批判しちよるうちは、わしもその氣になつて調子合わせていたわけいや。ところがわしは、まさか奴等があのえに分派活動まで始めるとは思わんじやつた。それから、さて、どねえしよかちゅう訳いの。その日から赤旗を隅から隅まで全部読む、全部ちゅうても八〇パーセント位かの、少し残す時もあるが。それから、去年の半ば頃から『前衛』を掘けて、めばしい論文は全部さらう、県委員長にいうて、県委員会の勤務員全員で学習するちゅうて、わしとしては近年になく必死になつたのう。なにしろ県党を守らんにゃいけん、そのための理論武装をせんにゃいけんと思ひつめてのう」

そうだ、どんな時にも組織だけは守らねばならないのだ、と福家は府川の話聞きながら考えていた。児玉は黙つてしまつて、畳の一点をみつめたままだった。

「しかし、そいでよう、たちまちの内にすっかり理論武装したもんですねえ」

と久賀がいった。

「わしの場合は、時間の問題ではなかつたの。勉強に時間をかけたとか、いろいろ論文を読んだとかいうんではのうて、何か、根本的な考えが違つちよつたような感じでの、そこんところが分かつた時、はつとしたそいや」

「菊村さん、これ着て。お父ちゃんのやけど、洗濯はしてあるんよ」

台所の出入口の三和土で、菊村が行水を使い、頭髮を洗い流しているところへ、障子を立てて、貞子が肌着と、洗い晒した浴衣を差し込んだ。菊村が何かぼそぼそと答えている。福家は、障子のこちら側から声をかけた。

「大丈夫か」

「ああ、からだもぬくうなつて、さっぱりした」

福家が障子の隅から顔を出すと、菊村はこども用の楕円形のバスの中に立つて髪の毛を拭っていた。慌てて前を隠しながらきまり悪げに苦笑した。菊村は、終いにどしゃ降りになつた雨の中をバイクでとぼして来て、眉毛からさえも雨滴をしたたらせる程の全身濡れ風になつたのだ。貞子が急いで湯を沸かし、行水を使わせた。

「このままでは、いつまでたつても堂々巡りじゃのう」

福家が台所との境の障子を閉めると、久賀がいった。

「なら、こねえな提案はどうか。児玉君の意見は意見として認めて、これから一致点を見出しうるまで討論してゆ